

日本漢字音についての一考察

～台湾閩南語から見た若干の漢音・呉音の音韻的現象～

黄 本 元

一、はじめに

日本漢字音の研究では、藤堂明保氏が「中国語音韻論と漢音呉音」（『国語学』国語学会編輯第16輯）のなかで述べているように音韻論の方法を用いて中国語（漢語）の音系を解釈し、合わせてその結論から漢音・呉音との関係を考察したのは一般の方法である。藤堂氏は、

上古漢語（周・秦・漢・魏）、中古漢語（隋・唐）、古官話（宋・元・明の北方雅言）及び近代官話の四者のうち、漢音・呉音に直接関係するのは、中古漢語である。併しその本質を明らかにするには、近代官話及び古官話の音韻論的解釈から多くの示唆をうける。

と述べ、日本漢音・呉音の実態を究明するには、中国語音系の本質を明らかにしなければならないと考えたのである。つまり中国語音系の本質を明らかにすればするほど、日本漢字音の実態ももう一步進んではっきりと把握できるようになるのである。現代中国語音系のほかに、漢語の方言や外国の借音を用いて日本漢音・呉音を考察するのも重要な方法である。外国の借音と言えば、日本漢字音もその一つであるが、日本漢字音研究では、安南（ベトナム）字音、朝鮮漢字音をよく利用している。漢語の方言と言えば、よく使われたのは客家（ハッカ）語、広東

語、廈門語（閩南系）等がある^①。台湾閩南語^②も閩南系で、音韻的には廈門語と同じ音系に属するものである。

従来中国漢語系の方言を利用した日本漢音・呉音についての研究が多いが、伊藤弥太郎氏もその方法を用いて研究をした。日本の漢音・呉音について、伊藤弥太郎氏は、「漢音・呉音の研究試稿（承前）」（大東文化学報5輯）の中で、大島正健博士の「漢音呉音の研究」で述べた説をもとに、つまり「呉音と上海・蘇州・杭州辺の音と又漢音と廈門音との間に聯絡の存在する」こと及び「蘇州音と廈門音との頭音の対照表」をもとにして、更にカールグレンの中国方言調査における興県音・文水音・福州音・広東音・汕頭音を合わせ考え、頭子音の発音に関しては漢音が山西省の興県音・文水音と密接な関係を持つことは明かであって、また廈門音もこの系統に属するものと言い得るのである、と述べ、廈門音と日本漢音との間に密接な関係があることを言っている。

しかし、日本漢音の故郷は伊藤氏の思った通り見いだされたのかは疑問の余地がないかも知れないが、「廈門音もこの系統（漢音）に属するもの」ということについて少々疑問を持っている。伊藤氏のいった通り明母・微母の頭子音或いは韻尾の p・t・k や m・n・ng から見れば廈門音は確かに山西省の興県音・文水音に属するかも知れない。だが、それらの現象を解釈するには、廈門音系の実態（言語的事実）を把握しないと、何も言えない音韻状態になるのではないかと思う。廈門音もこの系統（漢音）に属するものがあるとしてもすべてが漢音系統に属するものではないのである。つまり別の面から見たら結果的に完全に相反する可能性もあるのではないか。つまり日本の呉音系統から考えればどうなるのだ

①スウェーデンの言語学者 B カールグレンの『中国語音韻学研究』（高本漢著 趙元任・李方桂譯 臺灣商務印書館發行 1975）のなかには、ほかに汕頭、福州、温州、上海、北京、南京……など、十以上の方言が挙げられている。

②現代閩南語とは、現在台湾に住んでいる人々が日常生活の中で使っている言葉の一つである。この小論では閩南系の台湾語を指す。

ろう。呉音系統に属するものはなかろうか、という疑問が出てくるのである。

廈門音系の音韻実態のと言え、それは「文・白異読」^③という現象である。つまり一つの言語は二つの「言語層」（それぞれ違う年代層を持つ言語）が同時に込み入って使用されている現象なのである。つまり歴史的な音韻事実からみればこの二つの言語層が同じ時代のものではないようだが、今のところでも混同して使用されることになっているのである。例えば、「富」、「分」、「糞」、「吠」には、文読音の「hu3」、「hun1」、「hun3」、「hui7」の頭子音「h」に対しては白話音が、「pu3」、「pun1」、「pun3」、「pui7」というように「p」となっている。前に言及した「蘇州音と廈門音との頭音の対照表」（大島正健博士）のなかに挙げられた廈門音の頭子音はいったいどんなものか、手元に資料（対照表）がないから分からないが、もしこの「文・白異読」という現象に注意を払わなかったとすれば、それはただ、まだあまりはっきりしていない音韻の研究上の頭子音だけにすぎないのではないかと思う。またそれが、どちらかの、どんな系統に属するかということを云々するには一理足りないのではないかと思わざるを得ないのでろう。

また、入声韻尾の「p・t・k」については、周知の通り台湾閩南語の文読音では整然とした形を持っているのに対して声門閉鎖音（-ʔ）を持っているのは白話音だけで生じ得た現象なのである。ほかに鼻音韻尾の「-m・-n・-ng」が、鼻音化されて母音に包含されたのも白話音でだけしか生じない現象である。更に韻母（母音）から見ても、その母音も明らかに対立して存在しているものが多いの

③「文・白異読」とは、「文読音」と「白話音」のことで、「文読音」は、主に文章を読むときの音で、「白話音」は主として話すときに使われる口語の音である。ただし、時代の推移のため両者が混同して使われることもよくある。今の台湾閩南語でもそういう現象がはっきりしている。どのような（規則的な）基準でこの「文読音」と「白話音」を区別するかは、『台湾閩南方言記略』（p.33張振興著 文史哲出版社 1989）をご参照。

である。しかもそれも「文・白異読」による対照的な現象である。例えば「爬 (pa5-pe5)」、「把 (pa2-pe2)」のように「a」を持っているのは「文読音」で、「e」を持っているのは「白話音」である。このように廈門音系が持っている特殊な「文・白異読」という事実的現象を究明しないと、頭子音だけではなく、ほかに何かの音韻的事実があっても廈門音系が漢音系か呉音系かを云々するには一理は足りないのではないかと思う。つまり前にも言ったようにもとの中国語音系の「本質」を究明しないと日本漢字音の実態を把握するのは難しい、ということになるのである。

この小論では、私は、伊藤氏の前掲論文の最後のところに取り上げた「呉音について一層の検討を加えて、趙元任の『現代呉語的研究』と対照を行い、上海音・蘇州音・広東音・福州音等の南方音系から推して、逆に呉音の範疇を推定して、夾雜したいわゆる呉音と、真に呉音の名に合致するもの（*この小論でのアンダーラインは著者）とを分類してみる」ことよりもう一步進んで日本呉音の実態を探究してみたいのである。しかし本稿は上海音・蘇州音の中国「呉語」系からではなく、そして福州音（閩北系）から推して日本呉音の実態を見ようとするものでもなく、直接に廈門音系に属する台湾閩南語を利用して台湾の現代閩南語の言語的事実から日本呉音の歴史的言語実態を検討し把握してみたいものである。

二、日本漢字音と台湾閩南語

拙論の「日本漢字音と中国語の「破音」」（『東呉日本語教育』 第十號）の中で述べたように、日本漢字音には、中国語の「破音」をそのまま取り入れるものもあるが、そのように声調を意味区別的手段とするものがあまり見られないようである。だが、時代的背景、地域的要素などを考えれば、中国語（漢語系の古代か現代を問わず）ではもとより「一字に多音」（いわゆる「破音」）という現象が存在するのだろう。「破音」というのは、いったいどのように発生して

そして今まで存在してくるのか、或いはそれは「中国語は、単音節を持つ言語で、「一字に多音」、「一音に多字」を用いて表現力を効率的に発揮するためのやや宿命的でまぬがれない」現象だけなのか^④、簡単に論証し得ないが、日本漢字音のように「時代と方処とを異にして出来た」一つの中国語（すなわち、新・旧の言語事実が混合したもの）のさるべき現象に過ぎないものだという可能性もあろう。だが、同じ漢語系で、廈門語と同じ音韻的な体系を持っている現代台湾閩南語、つまり「長-tiong5、tiong2、tng5、tiu~²・行-kia~⁵、heng5、hang5」などのような「一字に多音」の音韻的実態を、特に前にも述べた体系的に出来た「文・白異読」の二つの「言語層」実態を持っているのを考えてみるならば、中国語の「破音」というものが、新・旧の言語的事実を持っていることも容易に考えられるのであろう。

日本漢字音には、呉音・漢音・新漢音・唐音などがあってももちろんそれは「一字に多音」のことである。

沼本克明氏が、日本の漢音・呉音について≪わが国漢字音における漢音・呉音を、切韻系韻書の体系に対しての方向から定義づけるならば「呉音は切韻系韻書の体系に対して方処的なずれ及び時間的に遡るずれを有するものであり、漢音は時間的に降るためのずれを有するものである。」≫と述べている（沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』p.54）。そして沼本氏は、古代中国語音をもとにして由来した日本漢字音も次のように、「一字に多音」を持っているという現象について、「時代と方処とを異にする体系的な中国語が次の表のように日本に間歇的に移植され定着して、融合或いは混淆することなく日本語史上を生き続けてきたことを物語っている。」と述べている^⑤。

④王天昌『漢語語音學研究』（國語日報出版部）の p.362 をご参照。

⑤沼本克明『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）の p.3~5 をご参照。

漢 字	行	經	瓶	木	脚	頭	宮	遲	和	暖
呉 音	ギャウ	キャウ	ヒャウ	モク	キヤク	ズ	ク	ヂ	ワ	ナン
漢 音	カウ	ケイ	ヘイ	ボク	カク	トウ	キウ	チ	クワ	ダン
唐 音	アン	キン	ヒン	モ	キャ	ンウ	キュン	シ	ヲ	ノン

また沼本氏は、切韻系韻書のほかに別の方向から呉音・漢音を定義づけすることを試みたが、「呉音は経験的学習に裏づけされ維持されたもので、漢音は理論的な学習に裏づけされて維持されたものである」（前掲書の p.54）と言っている。

これは、台湾閩南語の「文・白異読」と全く同じような言語の習得過程そのものの事実を言っているのではないかと思われる。「白話音」は、日常生活の用語で、生まれてから自然的（*漢字は必ずしも必要なものではなく、意思伝達のために話し出す言葉である）に経験の積み重ねで習得し得るものであり、「文読音」は、古典学習のために「書学仔」（塾、私塾）に行って先生について教えてもらって覚えた經典的「字音」そのものである^⑥。だから、「字」に依らないで自然に一つ一つ覚えた言葉を類推によって別の言葉を読み出すことが出来ないだろうが、字音（韻書）からほかの字音を論理的に類推することが出来るものは、「文読音」そのものである。

この点からして従来の日本漢字音研究では廈門音系と日本漢音系との間に類似的な音韻実態を持っていることがが多いという点が考えられるのであろう。つまり同じ言語習得の過程を経て覚えた人工的要素が入っているのだという点なのである。もしくは類似的なまたは同じ系統の韻書を通し習得し得たものだから類似的な音韻実態を示すようになっているのであろう。たとえば、廈門音系の伝統的な韻書には、『彙音妙悟』（泉州語音）、『増註雅俗通十五音』（略称“十五音”、漳州音）、『戚林八音』（福州語音）があげられる。だが、それは音韻学専門家

⑥許極燦『台湾語概論』（臺灣語文研究發展基金會 1990）の p.129～p.133 をご参照。

の韻書をもとにして編纂されたようなものである^⑦。

日本漢字音の習得について、沼本氏は、「わが呉音は中国選述書の反切に対しては、規則的対応はし得ず、反切利用も個別的利用しかなし得ないという限界を有していたはずなのである」のに対して、「中国側反切は、それによって漢音を学習する、という極めて積極的な意味を有していたと考えられる。」と言っている。つまり、日本の漢音は、その一面に、明らかに祖系音以外のいわば反切による人為音を含んでいることにならざるを得ないのである^⑧。

次に日本漢字音研究では呉音の伝来経路について朝鮮経由説と中国直接交流説の二説があるが、この小論ではそれを完全に無視して日本の漢字音と台湾閩南語に存在している言語的音韻事実を中心として論を進めてみたいのである。

三、台湾閩南語の文読音・白話音から見た 若干の日本の漢音・呉音の音韻的現象

廈門音系（台湾閩南語）から日本漢字音を考察した研究の中に、陳瑤蒲氏の「漢学対日本訓読之貢献」（『国文学報 第十六期』 国立臺灣師範大学国文学系印行 1987）がある。それは閩南語と「呉音」（華夏江南方言の呉語の音）から万葉仮名の祖系音を論じたものだが、万葉の最初の歌の「毛」「美」「久」「須」「思」「君」等の漢字をもとに述べた。そしてこれらの字例をもって「当日大和的訳音泰半取自華夏江南方言的呉音」という結論を下した。つまり万葉当時の音の大半は、当時中国の呉地方の音から借りたものだというのである。だが、陳氏にあげられた字例またその論じたところを見たら、それらは呉地方の音だけではなく閩南語とほぼそっくりだとも言えるのではないか。陳氏はその閩南語の事実を無視してただ呉地方の音にしか目をやらないのはおかしいのではなからうか。

⑦許極燉『台湾語概論』（臺灣語文研究發展基金會 1990）の p.90～p.94 をご参照。

⑧沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院 1982）の p.55 をご参照。

日本漢字音について陳氏の研究とはだいぶ違った方向から論を進めようとした研究がある。つまり台湾閩南語を中心に閩南語と日本漢字音について考察をしたものがある。それは、篠原正巳氏の『台湾語雑考 日本漢字音との近似性』（1993. 8 発行者 篠原正巳）である。篠原氏は、「Ⅳ 日本漢字音と台湾語の比較」という章のなかで、(1)“梗摂庚・清韻の類似”、(2)“梗摂錫・陌・昔韻（入声韻）の類似”、(3)“蟹摂齊韻の類似”、(4)“仮摂麻韻の類似”、(5)“流摂尤韻の類似”の項をあげ、日本呉音と台湾語の白話音との間に存在する類似点を明らかに指摘してある。そして同書の p.193 のなかでは、このような呉音と白話音の類似現象は一つの例だけではなく、ほかにもいくつかの例があるから、それは「偶然の一致ではない」現象なのだとやっている。だが、篠原氏にあげられた字例（103例）をいちいち検証してみると、氏の指摘したとおりそれは、対照そして対応にもなった類似現象なのである。そしてそれら現象ははっきりとした事實的音韻で、すなわち＜「文読音－漢音・白話音－呉音」＞というような対応現象だと言ってもいいのではないかと思う。

この小論では、私は、篠原氏の研究を踏まえてもう一步進んで篠原氏とちょっと違った方向からこの対応現象を考えようとする。ここではまず篠原氏にあげられた例字（韻母中心）を基盤にしてすこし手を加えて（例えば、「禮」「樞」「馬」など）、またはほかの字例（これもまた大体韻母（母音）を中心に）も入れて〔表のⅠ〕を作り上げたものである。もう一つ私が、声母（子音）から考えて製作したのは〔表のⅡ〕である。

◎〔表Ⅰ〕^⑨

字 例	台（文）	聲調	台（白）	聲調	日（呉音）	日（漢音）
1 驚	keng	1	kia～	1	キヤウ	ケイ
2 京	keng	1	kia～	1	キヤウ	ケイ
3 鏡	keng	3	kia～	3	キヤウ	ケイ
4 檠	keng	3	kia～	3	キヤウ	ケイ
5 青	chheng	1	chhi～	1	シャウ	セイ
6 請	chheng	2	chhia～	2	シャウ	セイ
7 正	cheng	3	chia～	3	シャウ	セイ
8 情	cheng	5	chia～	5	シャウ	セイ
9 精	cheng	1	chia～	1	シャウ	セイ
10 盛	seng	7	sia～	7	ジャウ	セイ
11 聲	seng	1	sia～	1	ジャウ	セイ
12 成	seng	5	sia～	5	ジャウ	セイ
13 城	seng	5	sia～	5	ジャウ	セイ
14 聖	seng	3	sia～	5	ジャウ	セイ
15 影	eng	2	ia～	2	ヤウ	エイ
16 營	eng	5	ia～	5	ヤウ	エイ
17 英	eng	1	ia～	1	ヤウ	エイ

⑨a.表記は教会ローマ字正書法に準拠する。ただし、鼻音化韻母は～になる。

b.日本漢字音は藤堂明保編『学研漢和大事典』（1977 学習研究社）によるもので、台湾語（閩南系）は、許極燦編著『常用漢字臺語詞典』（自立晚報社文化出版部 1993）、甘為霖著『廈門音新字典』（臺灣教會公報社 1978）によるものだが、詹鎮卿編『國臺音小辭典』（蘭記書局 1947）、盧淑美著『臺灣閩南語音韻研究』（文史哲出版社 1977）によるものもある。

c. “*” が付けてある発音、〔表のⅠ〕の1～72のなかの「声調」は、上記の字典、著書によるものである。ただし作者によるものも少数ある。

18	纓	eng	1	ia~	1	ヤウ	エイ
19	羸	eng	5	ia~	5	ヤウ	エイ
20	聽	theng	1	thia~	1	チャウ	テイ
21	廳	theng	1	thia~	1	チャウ	テイ
22	呈	teng	5	tia~	5	ヂャウ	テイ
23	定	teng	7	tia~	7	ヂャウ	テイ
24	庭	teng	5	tia~	5	ヂャウ	テイ
25	程	teng	5	tia~	5	ジャウ	テイ
26	錠	teng	7	tia~	7	ジャウ	テイ
27	錠	teng	7	tia~	7	ジャウ	テイ
28	兵	peng	1	pia~	1	ヒャウ	ヘイ
29	丙	peng	2	pia~	1	ヒャウ	ヘイ
30	併	peng	7	pia~	7	ヒャウ	ヘイ
31	餅	peng	2	pia~	2	ヒャウ	ヘイ
32	命	beng	7	mia~	7	ミャウ	メイ
33	明	beng	5	mia~	5	ミャウ	メイ
34	名	beng	5	mia~	5	ミャウ	メイ
35	迎	geng	5	gia~	5	ギャウ	ゲイ
36	嶺	leng	2	nia~	2	リャウ	レイ
37	領	leng	2	nia~	2	リャウ	レイ
38	陵	leng	5	nia~	5	リャウ	レイ
39	驛	ek	8	iah	8	ヤク	エキ
40	易	ek	8	iah	8	ヤク	エキ
41	役	ek	8	iah	8	ヤク	エキ
42	益	ek	8	iah	8	ヤク	エキ

43	亦	ek	8	iah	8	ヤク	エキ
44	赤	chhek	4	chhiah	4	シャク	セキ
45	跡	chek	4	chioh	4	シャク	セキ
46	績	chek	4	chioh	4	シャク	セキ
47	蹟	chek	4	chioh	4	シャク	セキ
48	夕	sek	4	siah	4	ジャク	セキ
49	石	sek	8	siah	8	ジャク	セキ
50	席	sek	8	siah	8	ジャク	セキ
51	錫	sek	4	siah	4	ジャク	セキ
52	壁	phek	4	piah	4	ヒャク	ヘキ
53	摘	tek	4	tiah	4	チャク	テキ
54	犀	se	1	sai	1	サイ	セイ
55	細	se	3	sai	3	サイ	セイ
56	蹄	te	5	toe	5	ダイ	テイ
57	第	te	7	toe	7	ダイ	テイ
58	題	te	5	toe	5	ダイ	テイ
59	替	the	3	thoe	3	ダイ	テイ
60	體	the	2	thai	2	タイ	テイ
61	馬	ma	2	be	2	メ	バ
62	暇	ha	5	he	5	ゲ	カ
63	化	hoa	3	hoe	3	ケ	カ
64	改	kai	2	koe	2	ケ	カイ
65	瓜	koa	1	koe	1	ケ	カ
66	界	kai	3	koe	3	ケ	カイ
67	疥	kai	3	koe	3	ケ	カイ

68	階	kai	1	koe	1	ケ	カイ
69	怪	koai	3	koe	3	ケ	カイ
70	灸	kiu	7	ku	7	ク	キウ
71	枢	kiu *	7	khu	7	ク	キウ
72	啞	a	2	e	2	エ	ア
73	矮	ai	2	e	2	エ	アイ
74	牙	ga	5	ge	5	ゲ	ガ
75	有	iu	2	u	7	ウ	ユウ
76	久	kiu	2	ku	2	ク	キュウ
77	舅	kiu	7	ku	7	ク	キュウ
78	舊	kiu	7	ku	7	ク	キュウ
79	龜	kui	1	ku	1	ク	キ
80	九	kiu	2	kau	2	ク	キュウ
81	臼	khu	1	khu	7	グ	キュウ
82	邱	khiu	1	khu	1	ク	キュウ
83	丘	khiu	1	?		ク	キュウ
84	牛	giu	5	gu	5	グ	ギユウ
85	假	ka	2	ke	2	ケ	カ
86	加	ka	1	ke	1	ケ	カ
87	家	ka	1	ke	1	ケ	カ
88	架	ka	3	ke	3	ケ	カ
89	嫁	ka	3	ke	3	ケ	カ
90	價	ka	3	ke	3	ケ	カ
91	傢	ka	1	ke	1	ケ	カ
92	嘉	ka	1	ke	1	ケ	カ

93	稼	ka	3	ke	3	ケ	カ
94	佳	ka	1	ke		ケ	カ
95	解	kai	2	ke	2	ケ (ゲ)	カイ
96	街	kai	1	ke	1	ケ	カイ
97	衙	ga	5	ge	5	ゲ (ゴ)	カ (ギョ)
98	芽	ga	5	ge	5	ゲ	ガ
99	華	hoa	1	hoe	1	ゲ	カ
100	花	hoa	1	hoe	1	ケ	カ
101	和	ho 和平	5	hoe/he	5	ワ	カ
102	話	hoa	7	oe	7	エ (エ)	カ
103	會	hoe/koe3	7	e	7	エ	カイ
104	鞋	hai	5	e	5	ゲ	カイ
105	蟹	hai	1	he	7	ゲ	カイ
106	蛙	oa	1	ke*	1	エ (エ)	ワ
107	蝦	ha	5	he	5	ゲ	カ
108	下	ha	7	he/ke/e	7	ゲ	カ
109	廈	ha	7	e	7	ゲ	カ
110	外	goa	7	goe	7	ゲ (グエ)	ガイ (グワイ)
111	叉	chha	1	chhe	1	シャ	サ
112	差	chhai	1	chhe	1	シャ/セ	サ/サイ
113	西	se	1	sai	1	サイ	セイ
114	婿	se	3	sai	3	サイ	セイ
115	沙	sa	1	soa	1	シャ	サ
116	鯊	si	1	soa	1	シャ	サ
117	砂	sa	1	soa	1	シャ	サ

118	紗	sa	1	se	1	シャ	サ
119	蛇	sia	5	choa	5	ジャ	シャ
120	二	ji	7	nng (兩)	7	ニ	ジ
121	許	hi	2	kho	2	コ	キョ
122	客	khek	4	kheh	4	キヤク	カク
123	格	kek	4	keh	4	キヤク	カク
124	隔	kek	4	keh	4	キヤク	カク
125	把	pa	2	pe	2	ヘ	ハ
126	爬	pa	5	pe	5	ベ	ハ
127	債	chai	3	che	3	セ	サイ
128	齋	chai	1	che	1	セ	サイ
129	脆	chhui	3	chhe	3	サイ	セイ
130	遠	oan	2	hng	7	オン	エン
131	園	oan	5	hng	5	オン	エン
132	利	li	7	lai	7	リ	リ
133	裏	li	2	lai	7	リ	リ
134	禮	?	?	le	2	ライ	レイ
135	荔	li*	7	lai*	7	ライ・リ	レイ・リ
136	犁	li*	5	le	5	ライ・リ	レイ・リ
137	笠	lip	8	leh	8	リュウ	リュウ
138	梨	li*	5	lai	5	リ	リ

〔表の I〕を検証しながらまず韻母から考えてみよう。漢音の韻母、例えば、
 <有-ユウ (yu)・久-キュウ (yu)・牙-ガ (a)>が、台湾閩南語となると、
 <有-iu2・久-kiu2・牙-ga5>というようになる。しかもこの場合の台湾閩南
 語は、白話音にはならず文読音になっている。逆に呉音の韻母、例えば、<加-

ケ(ke)・假ーケ(ke)・架ーケ(ke)＞が、台湾閩南語となると、＜加-ke1・假-ke2・架-ke3＞というような発音になる。しかもこの場合の台湾閩南語は、文読音にはならないで、白話音になるのである。こういう音韻的対応現象（「文読音－漢音・白話音－呉音」）が、いろいろの例があってそれを検証したらすぐ理解できると思うが、その中で量的に考えれば最も多くて一番目立つ音韻の対応的（全く同じだと言えるほどの）な存在を示しているのは、いわゆる「仮摂麻韻」、「蟹摂齊韻」の字群である。篠原氏にあげられた字例のほかに、次のようなものもある。母音から見ると、やはり「文読音－漢音・白話音－呉音」という対応がはっきりと見られる。

字例	台（文）	聲調	台（白）	聲調	日（呉音）	日（漢音）
叉	chha	1	chhe	1	シャ	サ
差	chhai	1	chhe	1	シャ／セ	サ／サイ
沙	sa	1	soa	1	シャ	サ
鯊	sa	1	soa	1	シャ	サ
砂	sa	1	soa	1	シャ	サ
紗	sa	1	se	1	シャ	サ
把	pa	2	pe	2	ヘ	ハ
爬	pa	5	pe	5	ヘ	ハ

このように篠原氏の「IV 日本漢字音と台湾語の比較」を踏まえて検証検討してきたが、次の字例を見てみよう。

字例	台（文）	聲調	台（白）	聲調	日（呉音）	日（漢音）
蛇	sia	5	choa	5	ジャ	シャ
二	ji	7	nng（兩）	7	ニ	ジ
遠	oan	2	hng	7	オン	エン
園	oan	5	hng	5	オン	エン

つまり、「蛇」「二」「遠」「園」の四字に声母（子音）も韻母（母音）のよ
うに、「文読音－漢音・白話音－呉音」というような対応が見られるのではない
か。このような疑問を持ってこの小論を進めようと考えたのは、前にも述べ
た篠原氏と違う方向から、すなわち声母（子音）から「文読音－漢音・白話音－
呉音を」考えて製作したのはこの〔表のⅡ〕なのである。

◎〔表Ⅱ〕

字 例	台(文)	聲調	台(白)	聲調	日(呉音)	日(漢音)
1 封	hong	1	phang	1	フウ	ホウ
2 峰	hong	1	phang	1	フ	ホウ
3 費	hui	3	pi	3	ヒ	ヒ
4 幅	hok	8	pak	8	フク	フク
5 腹	hok	4	pak	4	フク	フク
6 放	hong	3	pang	3	ホウ	ホウ
7 房	hong	5	pang	5	ボウ	ホウ
8 反	hoan	2	peng	2	ホン	ハン
9 覆	hok	4	phak	4	ブ・フウ・フク	フ・フウ・フク
10 紡	hong	2	phang	2	ホウ	ホウ
11 帆	hong	5	phang	5	ボン	ハン
12 捧	hong	2	phong	2	フ	ホウ
	hong	5	phang	5		
13 縫	hong	5/7	phang	7	ブ	ホウ
			pang	5		
14 芳	hong	1	phang	1	ホウ	ホウ
15 蜂	hong	1	phang	1	フ・フウ	ホウ
16 扶	hu	5	pho	5	ブ	フ
17 豊	hong	1	phong	1	フ	ホウ

18	敷	hu	1	pho	5	フ	フ
19	浮	hu	5	phu	5	ブ	フウ
20	墳	hun	5	phun	5	ブン	フン
21	飯	hoan	7	png	7	ボン	ハン
22	方	hong	1	png	1	ホウ	ホウ
				hng	1		
23	斧	hu	2	po	2	フ	フ
24	脯	hu	2	po	2	フ	フ
25	傳	hu	3	po	3	フ	フ
26	飛	hui	1	poe	1	ヒ	ヒ
27	富	hu	3	pu	3	フ	フウ
28	孵	hu	1	pu	7	フ	フ
29	痲	hui	3	pui	3	バイ	ハイ
30	肥	hui	5	pui	5	ヒ	ヒ
31	吠	hui	7	pui	7	バイ	ハイ
32	分	hun	1	pun	1	ブン	フン
33	糞	hun	3	pun	3	ブン	フン
34	拂	hut	4	put *	4	ホチ	フツ
35	佛	hut	8	put	8	ブツ・ブチ	フツ
36	發	hoat	4	puh	4	ホチ・ホツ	ハツ
37	埠	?	?	po	3	ブ	ホ
38	哺	?	?	po	7	ブ	ホ
39	夫	hu	1	po *	1	フ	フウ
40	父	hu	7	pe	7	ブ	フ
41	婦	hu	7	pu	7	ブ	フウ

42	飯	hoan	7	pan	7	ボン	ハン
43	棚	peng	5	pe~	5		
44	少	siau	2	chio	2	ショウ	ショウ
45	上	siong	7	chiu~	7	ジョウ	ジョウ
46	水	sui	2	chui	2	スイ	スイ
47	石	sek	8	chio	8	ジャク	セキ
48	樹	su	7	chhiu	7	ズ・ジュ	シュ
49	拾	sip	8	chap	8	ジュウ	シュウ
50	手	siu	2	chhiu	2	ス・シュ	シュウ
51	守	siu	2	chiu	2	ス・シュ	シュウ
52	叔	siok	4	chek	4	スク	シュク
53	蛇	sia	5	choa	5	ジャ・タ・イ	シャ・タ・イ
54	舌	siat	8	chih	8	ゼチ・ゼツ	セツ
55	參	sam/ som	1	chham	1	サム	サム
56	星	seng	1	chhi~	1	ショウ	セイ
57	醒	seng	2	chhi~	2	ショウ	セイ
58	像	seng	7	chhiu~	7	ゾウ	ショウ
59	蓆	sek	8	chhio	8	ジャク	セキ
60	謝	sia	7	chia	7	ジャ	シャ
61	松	siong	5	chheng	5	シュ	ショウ
62	十	sip	8	chap	8	ジュウ	シュウ
63	腥	seng	1	chhi~	1	ショウ	セイ
64	成	seng	5	chia~	5	ジョウ	セイ
65	常	siong	5	tia~ *	5	ジョウ	ショウ
66	程	theng	5	tia~	5	ジョウ	テイ

67	腸	tiong	5	tng	5	ジョウ	チョウ
		chhiang	5				
68	誠	seng	5	chia~	5	ジョウ	セイ
69	食	sit	8	chiah	8	ジキ	シヨク
70	脣	sun	5	tun	5	ジョン・シン	シュン・シン
71	藹	su	5	chi	5	ジョ	シヨ
72	深	sim	1	chhim	1	シム	シム
73	孀	sim	2	chim	2	シム	シム
74	沈	sim	2	tiam	5	ジム・シム	チム・シム
		tim	5	tim*	5		
75	伸	sin	1	chhun	1	シン	シン
76	粟	siok	4	chhek	4	ソク	シヨク
77	生	seng	1	chhi~	1	ショウ	セイ
78	市	si	7	chhi	7	ジ	シ
79	拭	sek	4	chhit	4	シキ	シヨク
80	飼	su	7	chhi	7	ジ	シ
81	碎	sui	3	chhui	3	サイ	サイ
82	斜	sia	5	chhia	5	ジャ	シャ
83	舐	si	7	chi~	7	ジ	シ
84	盤	phoan	5	poa~	5	バン	ハン
85	田	tian	5	chhan	5	デン	テン
86	陣	tin	7	chun	7	ジン	チン
87	柱	tu	7	thiao	7	ジュウ	チュウ
88	轉	choan	2	tng	2	テン	テン
89	住	chu	7	toa	7	ジュウ	チュウ

90	知	ti	1	chai	1	チ	チ
91	窗	chhong	1	thang	1	ソウ	ソウ
92	含	ham	5	kam	5	ゴム	カム
93	寒	han	5	koa~	5	ガン	カン
94	汗	han	7	koa~	7	ガン	カン
95	糊	ho	5	ko	5	ゴ	コ
96	厚	ho	7	kau	7	ゲ	コウ
97	猴	ho	5	kau	5	グ	コウ
98	行	heng	5	kia~	5	ギョウ	コウ
99	呼	ho	1	kho	1	ク	コ
100	虹	hong	5	kheng	7	グ・グウ	コウ
101	壺	o	5	ko*	2	グ・ゴ	コ
102	許	hi	2	kho	2	コ	キョ
103	長	tiong	5	tng	5	ジョウ・チョウ	チョウ・チョウ
		tiong	2	tiu~	2		
104	博	phok	4	poah	8	ハク	ハク
105	跛	pho	2	pai	2	ハ・ヒ	ハ・ヒ
106	逢	phi	5				
		hong	5	pang	5	ボウ	ホウ

篠原氏は、前掲書の中で、声母の比較にも言及した。「台湾語の特徴」の章で台湾語の声母、つまり中国語の「中古音」濁音の清音化、唐代の鼻音声母非鼻音化、並母・明母・日母・泥母・来母、または軽唇音・母音声母などについて詳しく記述した。また「日本漢字音」の章では漢音・呉音の声母とその違いについてもたくさん説明を加えたのである。だが、日本漢字音と台湾語の声母の比較は、「日本漢字音と台湾語の比較」の章では、《唐代の非鼻音化音》漢音と文言音の

比較をし、つまり「並母<<m→mb>>」と「日母<<ㄋ→ㄋㄛ>>」について多分に検討したが、「文言音」との比較に終わってしまって、「白話音」との比較が、されないまま終わっているのである。

〔表のⅡ〕の中に示されたように、台湾閩南語に整然とした声母の対応が存在している。ここでは、便宜的にその対応を三つのグループとしてあげることにする。

〔グループⅠ〕は、大体いわゆる「唇音」の類に属するものである。この「唇音」は、台湾閩南語では、<h（文読音）→p・ph（白話音）>というような対応がみられ、「p」表記は無気音で「ph」表記は有気音である。〔グループⅡ〕は、だいたい「舌音・歯音」の類に属するものである。これらは台湾閩南語では、<s（文読音）→ch・chh（白話音）>というような対応をしている。「ch」表記は無気音で「chh」表記は有気音である。また〔グループⅢ〕は喉音の「匣母」の類に相当するもので、このグループは台湾閩南語では、<h（文読音）→k（白話音）>というような対応がなされている。

◎〔グループⅠ〕

字例	台（文）	聲調	台（白）	聲調	日（呉音）	日（漢音）
縫	hong	5/7	phang	7	ブ	ホ
			pang	5		
扶	hu	5	pho	5	ブ	フ
浮	hu	5	phu	5	ブ	フ
墳	hun	5	phun	5	ブン	フ
飯	hoan	7	png	7	ボン	ハ
癖	hui	3	pui	3	バイ	ハ
肥	hui	5	pui	5	ビ	ヒ
吠	hui	7	pui	7	バイ	ハ
分	hun	1	pun	1	ブン	フ

◎〔グループⅡ〕

字例	台（文）	聲調	台（白）	聲調	日（呉音）	日（漢音）
蛇	sia	5	choa	5	ジャ・タ・イ	シャ・タ・イ
舌	siat	8	chih	8	ゼチ・ゼツ	セツ
席	sek	8	chhio	8	ジャク	セキ
謝	sia	7	chia	7	ジャ	シャ
市	si	7	chhi	7	ジ	シ
飼	su	7	chhi	7	ジ	シ
斜	sia	5	chhia	5	ジャ	シャ
舐	si	7	chi～	7	ジ	シ

◎〔グループⅢ〕

字例	台（文）	聲調	台（白）	聲調	日（呉音）	日（漢音）
含	ham	5	kam	5	ゴム	カム
寒	han	5	koa～	5	ガン	カン
汗	han	7	koa～	7	ガン	カン
糊	ho	5	ko	5	ゴ	コ
厚	ho	7	kau	7	グ	コウ
猴	ho	5	kau	5	グ	コウ
行	heng	5	kia～	5	ギョウ	コウ

この三つのグループにあげた字例を〔表のⅡ〕を参照しながら日本の漢音・呉音の声音（子音）を考えてみよう。つまり〔グループⅠ〕の台湾閩南語の声母の＜h（文読音）→p・ph（白話音）＞と対応しているのは、＜清（漢音）→濁（呉音）＞という日本の漢音・呉音の声母の対応である。そして〔グループⅡ〕の＜s（文読音）→ch・chh（白話音）＞と対応する日本の漢音・呉音の声母実態に

は、やはり＜清（漢音）→濁（呉音）＞というものが見られる。ところで、〔グループⅢ〕の＜h（文読音）→k（白話音）＞に相当するのは、またこの＜清（漢音）→濁（呉音）＞という対応である。

このようにはっきりと対応している現象は、量的に考えればこれは「偶然的に一致する」現象なのではなかろう。ところが、〔表のⅡ〕を参照していちいち検討していくと、すべての字例がこうであるとも言えないが、この現象が双方の言語に実存している、ということが認められるのであろう。特に〔グループⅠ〕と〔グループⅢ〕のような整然とした対応現象は、この二つの言語体系の中に、何か歴史的な背景が潜んでいるのではないかと思う。そして両言語体系におけるこの声母の音韻的現象を前述した韻母の対応と一緒に考えるならば、またそこに何か歴史的な背景が潜んでいるのではないかと思わざるを得ないのである。

四、おわりに

従来日本漢字音の研究では、日本漢字音の祖系音を探し求めるには中国語音系を先に求めて究明するのが、ごく一般の方法であるが、中国各地の漢語方言（広東音系、廈門音系、西北方言など）、または台湾閩南語を通して、更にほかの漢字音の関係資料、例えば朝鮮漢字音、安南（ベトナム）漢字音または仏教の資料を併せて研究すれば日本漢字音を究明するのにもっと有効的になるのであろう。そして一番重要なのは、まずいろんなそれぞれの言語的事実や、資料に反映した言語の歴史的背景とかを究明することであろう。ところが、廈門音系を利用して日本漢字音を考える先学がいるが、「文読音」（或いは「文読音」だけ）を中心に、そして日本の漢音を中心に考えるのが、今の実態のようである。

この小論では、以上のように台湾閩南語の文読音・白話音から若干の日本の漢音・呉音における音韻的現象、すなわちこの二つの言語体系における類似性とその音韻的な対応を探索しまた従来の研究も検討してみた。ところが、こんなにはっ

きりとしたような対応があるから直ちに両者の関係を論じて判断を下すのには不十分なところもあろう。そしてこの小論は、「廈門音系が日本の漢音系に属している」という定説に近いような通論から出発して纏めたものである。つまり伊藤氏の述べたように部分的には両者に表されている言語的事実に近いかも知れないが、具体的に言えば部分的には言語的事実に合わない可能性もあるのではないかと思うから、論説を進めて纏めたものなのである。

だから結論的に言えるのは、廈門音系には、日本の漢音系に属しているものもあれば、呉音系に属しているものもあるのだと思う。つまり同じ廈門音系に属する台湾閩南語のなかに存在する「文読音」も「白話音」もそれぞれ日本漢音・呉音の若干の音韻的事実を反映しているのだと思う。この小論では以上のように検討してきたが、取り上げたそれらの音韻的な対応現象は、偶然に一致し、または偶然的に生じたものとも言えないだろう。しかも、それは「夾雑した」ものではなく、例が少なくないということから、逆にその「体系的-一致性」がもっとはっきりと見られるのであろう。またこの二つの言語体系のなかにもともとそれぞれ個別的に見えて存在する音韻的事実が、いつの時代に、どんな過程を経てきたのかを探究する必要もあるのだろう。それを究明しないと、その「体系的-一致性」がどうしてこういうようにはっきりとそれらに反映したのか、ということ明らかにすることがまずできないだろうと思う。その歴史的背景と言語の音韻的事実を探究し再検討することは、今後努力すべき所の日本漢字音研究なのである。

ほかに再検討する必要があるものもたくさんあるが、例えば、台湾閩南語では声母或いは韻母から見て「文読音・白話音」には以上のような対応が見られるが、声調には違いがあっても、ほぼ同じだという点も興味深いところであろう。